

がんばる工織大生 | Active KIT students

伝統技法「絞り染め」の 継承と作品制作

布地の一部を糸などで絞ってから染色することで
さまざまな文様を染め出す「絞り染め」。
京都では千年以上前から受け継がれてきた伝統技法です。
2022年夏、絞り染め作品の制作・展示を行う
京都絞り工芸館が体験講座「SHIBORIラボ」を開催。
講座に参加し、その奮闘が京都新聞にも取り上げられた
岡田祐亮さん（デザイン・建築学課程4回生）に
活動を振り返っての思いを語ってもらいました。

Fig.1——岡田さんと、自ら制作したドレス

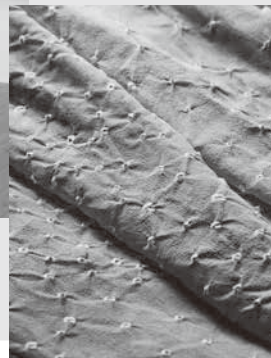


Fig.2——絞り染めならではのシワと文様

研究室のプロジェクトをきっかけに講座に参加

「絞り染め」はその名の通り、布地の一部を糸や紐で絞ってから染める技法で、絞られて圧力がかかっている部分には色が入らず、独特の文様を染め出せる点が特徴です。京都では京鹿の子絞りが有名で、市内にも多くの工房があります。今回、その一つである京都絞り工芸館の体験講座「SHIBORIラボ」に参加し、絞り染めを使った作品制作にも取り組みました。

この講座は、私が所属する中野仁人教授の視覚デザイン研究室の大学院生の先輩が企画したものです。私たちの研究室はヴィジュアルデザインとともに、伝統工芸を研究テーマとしています。その研究の一環として、伝統工芸を用いた作品の展示会を開くというプロジェクトが毎年企画されています。地域のさまざまな工房と連携してプロジェクトを展開しており、京都絞り工芸館も連携先の一つとなっています。私は以前から伝統工芸を用いた衣装づくりをしてみたいと思っており、興味と一致していたので、迷わずSHIBORIラボに参加。その他には、金彩や組紐の工房にも足を運びました。

丁寧な指導で絞り染めへの理解を深め、 納得のいく作品を制作できた

講座は2022年の8月からスタートしました。職人の方々から直接ご指導いただき、工房にある糸や染料も自由に使わせてもらいました。「いつ来てもいいよ」と言うくださり、多い時には週に5回通っていたことも。職人さんはとても優しく、何を聞いても丁寧に教えてもらえたので、初心者でしたが少しずつ技術を磨いていくことができました。

教えてもらった絞り染めの技法を使い、研究室の展示会のために制作したのが、子ども用のドレスです。結婚式などフォーマルな場面での着用を想定したもので、子どもが喜

ぶようにかわいらしい色や模様をつけました。布地を絞る作業だけでも10時間程度はかかり、さらに染色にも時間がかかります。気の遠くなるような作業でしたが、一心不乱に取り組みました。衣装に興味はあったものの、染めた後の縫製も初めてで、何度もほどいてはやり直しを繰り返しました。そうしてできあがったのは、青と紫のグラデーションに絞り染めの文様が映えるドレス。また、シルクスクリーンを用いた金彩加工も行い、さらにかわいらしい印象に仕上げました。

この子ども用ドレスだけでなく、卒業制作として大人向けの舞台衣装にもチャレンジしました。あるプロダンサーとフルート奏者の方に衣装を提供する機会をいただき、色味や形などの希望をヒアリング。何度も提案を重ねながら、最終的には「自然」「樹木」をイメージさせる緑の衣装を制作しました。この衣装には嵐絞りと呼ばれる絞り染め技法を使っており、繊細ながらもダイナミックな模様がポイントです。工房ではグラデーションに染め上げることはあまりいらしく、新鮮な発想だったようで、完成した衣装を見てとても喜んでくれたのが印象的でした。依頼者の方にも満足いただき、これらの衣装は実際に公演で着用されました。

非常に奥が深い伝統工芸の世界

私は大学院に進む予定で、進学後も衣装をつくり続けたいと考えています。さまざまな伝統工芸を使い、ダンス衣装をつくるのが目標です。小学生の頃からフィギュアスケートが好きで、今はバレエやコンテンポラリーダンスにも興味があるので、衣装制作という形でそうした世界ともっと深く関わられるのが楽しみです。

京都には多くの伝統工芸が伝わっており、絞り染め一つ取ってもたくさんの絞り方があります。高度な技術、緻密な美しさが魅力の、非常に奥が深い世界です。京都ならではの貴重な体験として、ぜひ多くの方々に伝統工芸に触れてみてほしいと思います。

京都の伝統工芸「絞り染め」の技術を受け継ぎ、
新たな発想でオリジナリティある創作に取り組み。